

## 番組「子どもに自分の“がん”を伝えられない」を見て

一昔前頃までは本人にがんを宣告するかどうかの問題があったが、今は本人に知らせるのが主流のようである。

最近では、子育て世代のがんを患った親が、子どもに知らせるかどうかの問題があるようである。

この問題を取り上げた番組「がんと向き合う：親子の苦悩～子どもに自分の“がん”を伝えられない～」を見た。

番組では、知らせることのメリット、デメリットが語られ、それぞれの事例が紹介され、また、知らせた折の子どものケアのために、どう知らせるか、どう話すかの参考となるマニュアル作りに取り組む内外の活動も紹介されていた。

この問題の番組を見て、ある学生からのメールを思い出した。

この学生は父親ががんであることを知らされたのは、がんがかなり重症になってからであったという。

なぜもっと早く知らされなかったのかという家族からの疎外感、また、早く知っていてももっと父親に何かしてあげられたのに……という負い目や後悔に、時が過ぎ去っても思い悩んでいるメール内容であった。

知らせた折の子どもの戸惑い等を思い遣ってなるべく知らせないという親心は理解できなくもないが、子どもはその親の死をその子どもなりに抱えて親の死後も生きていかななくてはならないのであり、学生からのメールのように子どもの心の中で親は生き続けているのである。

それだけに、家族のそれぞれの問題を家族の中でオープンにし、それぞれの家族のみんなが互いに向き合い、支え合って行くことこそが、“親子”、“家族”というものでないだろうか……。

知らせることによって、子どもは親ががんで死ぬかもしれないという厳しい現実には、また、親も子どもの戸惑いに向き合うことにもなるが、親子がその状況を家族として共に生活し、共に生きたという、後悔のない実体験・思い出こそが、その後の子どもの心の支えになるような気がするのだが……。

知らせるかどうかの問題は、親の死後も生きていかねばならないのは子どもであるだけに、後々の子どもの心の目線からの対応であって欲しいと願う。